職人盡畫本

勧進聖刊

四

特別
へ-4
8053
2

職人歌合畫本　勧進聖刊　四

職人歌合畫本

勧進聖判

四

へ4
8053
2

信友云此序詞七十一番職人哥合ニ継テモノセル由ヲイ（ルヽ）其哥合ニアハセミテ知ベシ

やまと哥乃道、都人士女これをもてあそぶもあら
ず花鳥はなさけをそへ、山林乞食乃客
なほ活計の埋もれたるに、わが
譲をよきてぬるとき、はたをあきんども、あきなひに
かへるころ、名月をもちよせ、まなく
ちへ家あそせたゞしきあらそひ
ひ、たゞかさなりて、六ノ文家の卅余人、いや
しき者の家はなしきかけ、そのむ

（朱書）都　士女　イ本 古写隠本　下ニ古朱イト探セルハコノ古写隠本ニ朱ニテ校シタルヲイヘリ　活 估　と 古　た 古　も　の　六ヽ文 估　ど 古 母 イ　ら 古 イ

昭和41年12月11日 寄贈
42 8112

しろきのぞみく、その名をかけざらむと、
ねがふ多生の根や、今たふく追思す
あとをたづねおしえをおもふて、精業の大
要のいはく、えし月と共に影とも
ばかりみちはきおくれたるまち〳〵
事はなくみづからをすゝめし―うつぞきて
八月朔の一ぞふにてきおきんあり、いは
ゆふ田まの花のおもやそむいふなの風騒

なり、またに花を影としらく、又おもひを
のゆる一首をくりふべき也やと、良識おま
よくみ其、あなたちつゞいぬさだ元之一巻
そこなりく、勅進のひじりを弁
総上人の室にいたりて、判者の紫をも
とむ、若しおもをはちごれ蔓におが
くつきより、命をなならむたそらの
道の遠くきわんが、世のあざむりなそ

づといへども、利に滑稽の談ずる、艶詞
正道のたすけとならざる免かれ、

一番

左

千寿

萬歳法師

右

繪解

二番
左獅子舞

右

猿曳

三番

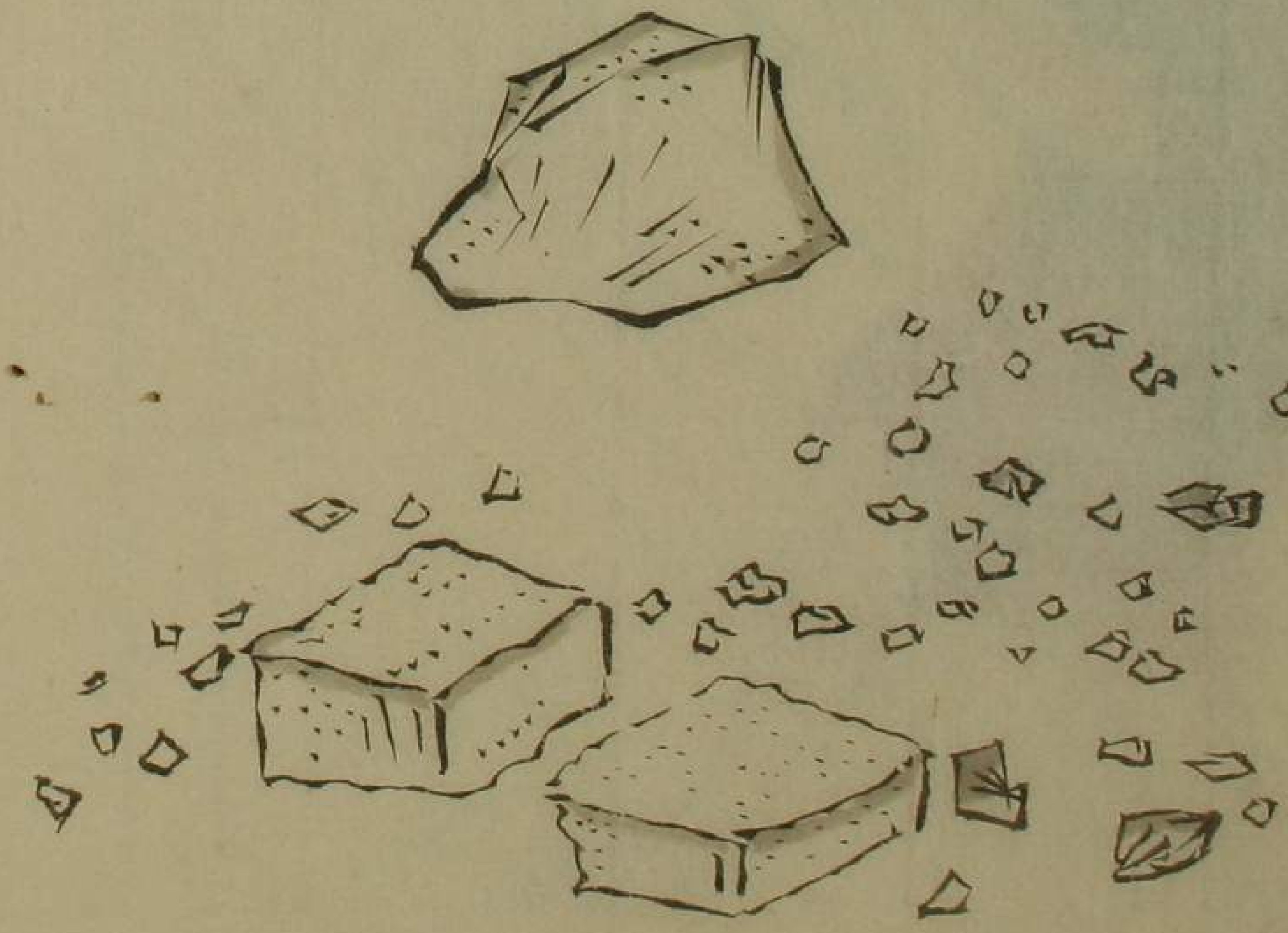
左 鶯飼

右 鳥さし

四番

左　おかひき

右
石きり



五番

左

桂の女

右

鬘ひねり

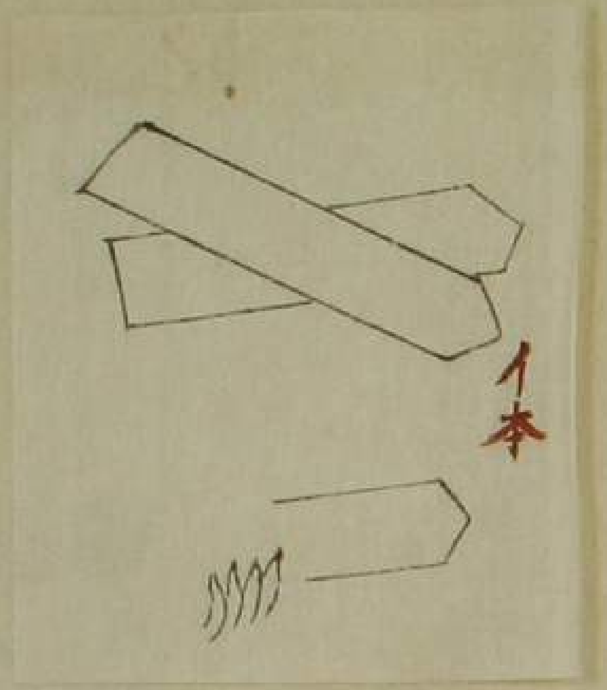
六番
左 算置

右 薦

七番

左 高野法師

右 順禮



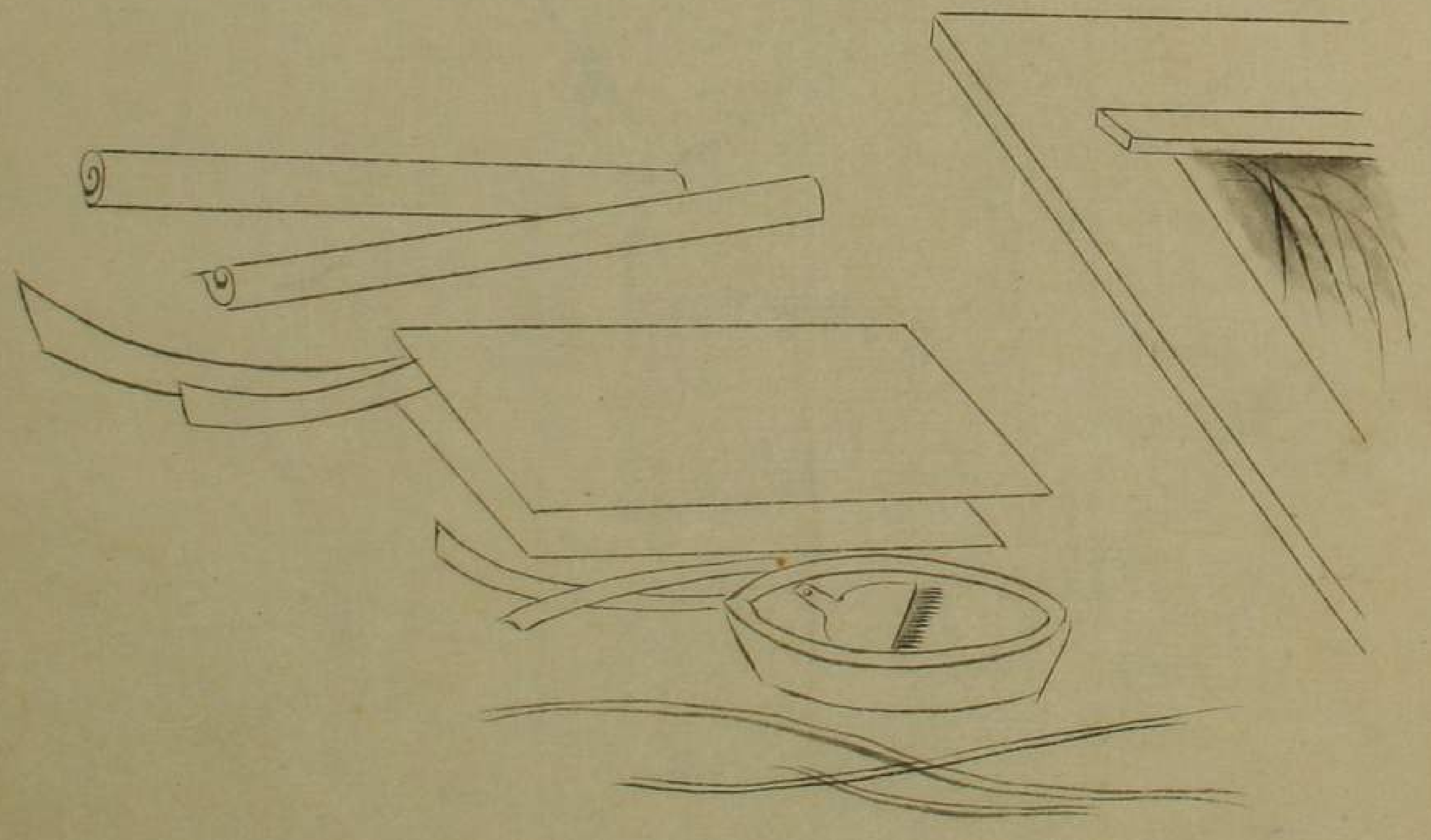
八番

左

かねたゝき

右

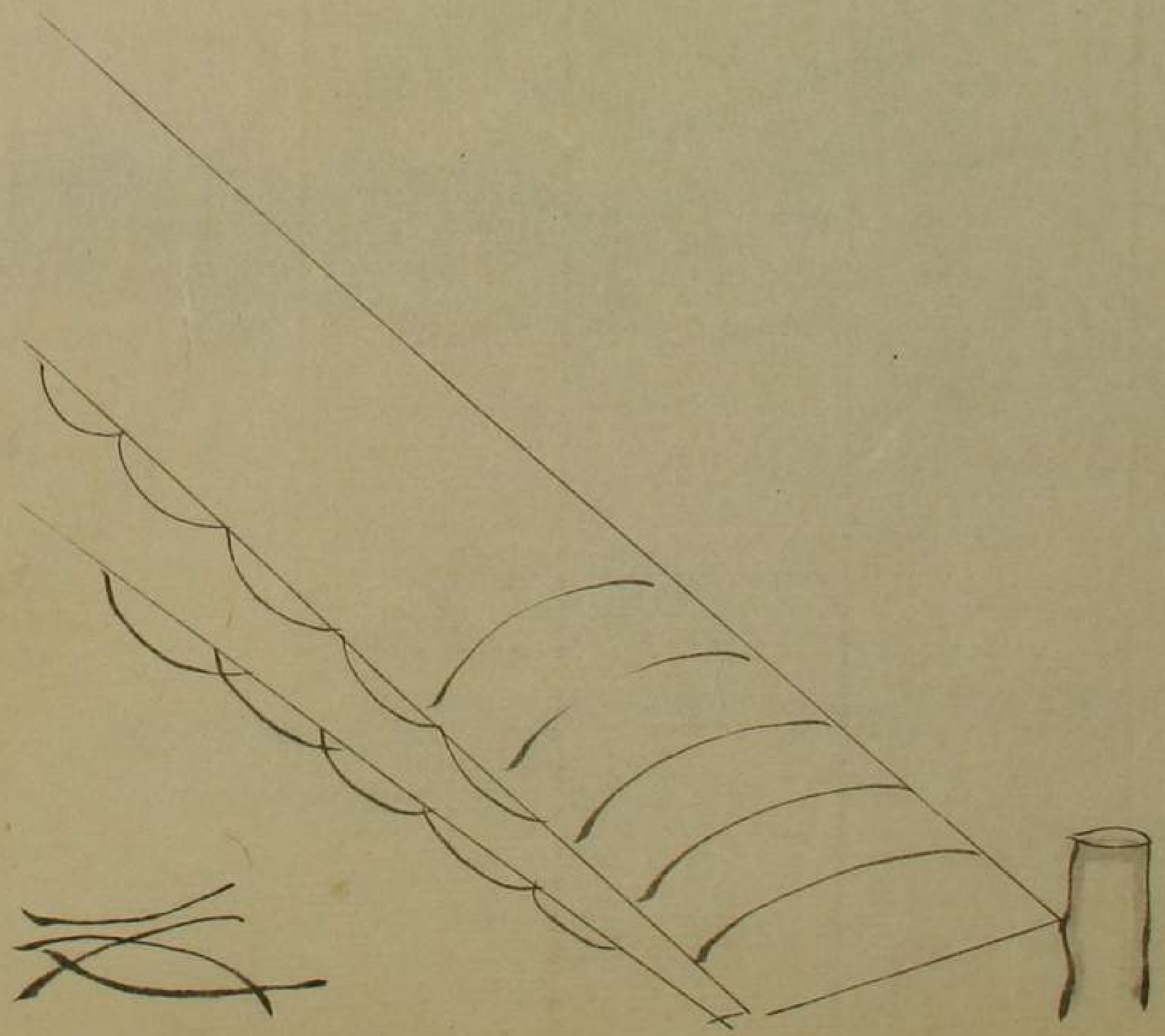
むねたゝき



一九番
左 ゑとり法師

古

ちり綾



十番
左
舩人

右
輿舁

十一番

左 農人

右 庭掃

十二番

左

桟木賣

右

竹賣

十三番

左

結をけ師

六

火鉢賣

十四番

左

糠粽賣

右

地黄煎賣

十五番

左 箕つくり売

右 ちまきみ売

十六番
左
なさうり売

右
魚売

一番　花
左　千秋万歳
右　絵解

一番　　題 花 述懐
左　持　千秋萬歳法師
きみのためまつ千秋万歳祝ふ花の木の枝ハさしさかえなん
右　　絵解
みところや花よりもまさる恋の絵ときうとうしき家まはてて
左歌ハ千秋万歳の能作ハ毎年正月の佳曲なれ
ハ法蔵法の完初に出ぬ歌会の一番にて
めでたきにまさる花の木の姿にあらてさしさかえなん
根元いふへき歌そあらぬ無かりてときこゆるを
右歌ハ絵解なる恋の絵ときなるをかすとみえ
家ましとそおもふさゆるいひうるへてる姿何雄

判者歌

のをのさしてそらしへもちと絵解の歌とハいはて
そてハ聞さらん歌合の一番の左を持の字お
わすれさうなれるやうなれと山つりけおきてこそ
おもひつれ侍るへし

二番

左 (獅子舞)

たちまちて春の木隠に舞ふ獅子のたく鼓にききほれ

右 勝 (猿曳)

花のさくかけはあそびしいくさの枝を乗ぶらんハちりなしてこそ

獅子ハ文殊の御乗もの猿ハ山王の使者のちの紀
座跡の律頭はふあやつるに花の本座にも
舞いでたハふてて獅子よ鼓の音も聞たまへ
おもしろきとまたおしの羯鼓の音をもおもひよせ
ぬるふしや猿の枝を揺ぶらんと思ひおきてく
花の枝をさぐるつきしほどころつぶれ侵にすゆ
右かまさるべきにや

三番

左 持 (鶯飼)

羽風にも花のあふれおとこるおさ葉ちらしいてあるせん

右 (鳥さし)

春ハまさるとても花の香ちをみ揉そくたる花の鳥のゑく

左羽風たる花のおもとハあそこなるといつるやさしく

此本せきひの二字を佗ハ
せかゐの二字を清水とせ
水をれと误しを又そを書
しるしぬ

すゆるにおもしろく深くちらにいてあらせんと侍るかと
いかなる山とてん送え侍る手をハらハ花の名所な
りそうくかへるさしほ山にあるハせきひの嗚呼にあ
るに侍りとしてまかしならハしたれ給ふなれ
ハまさにかくあるハさなるなる所の名なといいく
たりおそくよむやうなるをあるたく侍る手本の
ふかきに秋の色なるこそよまさほしく侍れこれ
ハ三つたるやうなるやいつさ色おほし難の歌とを
みえ侍るか

四番
左
おほいかきみ　イナシ

のこそかゝのめとそるの山風に花の香なからそらにふくそ

右　勝イ
石きさも　イナシ

あさほおけ春の山のたきあらハ石ふれ花をきりつゝそさむ

のこそりおほまえ大小の花咲のこふて盛りなる
やまみえハ病として姫やへてまゐりならへ石ふれ
花をききつゝそてしもんといへるこころのたき
いかりとこそふかき隠国にやすえ侍る古備とま
そ侍へきなるを

弁内侍日記下の
十三丁に此の山
ふかきや山ハこ
つとふるの
おやしの事
云ふ歌ハ云々
かきをしるす

六番
左　勝イ
桂の女　イナシ

春風にさそ伊の捕をいたゝきて袂につしら花そちる雨の許

[illegible]

右

花かつらおち髪ならハしらひおきひねりつきそれもらましものを

たゝふゆの捕をいふときて誰ともつしか蓑にてやハ
いつ字の月中の桂男よりいひ柱の女ハむらけ
よみゆるゝやき出あやなるぬ布のひとくきぬなぬ
てつしか花をいはそあるとよくいひなされてき
ふかきた風てふおとゆせ示せなく侍れと孟郊か一
月見花長安花ト侍るへつしか花をめくかくも
みそハ花の字のゐとかにをよ侍るへきまや太極の
つらのおち髪ならハしろ字おきてとふねるも
つらむまいつる花をよ字ころハせちるるへ出て左
ハ折ちらいつきてすゆるまゝや

六番

左

おくさんのさしたふやしたる花の時ハをといはれぬ形之なり

右 勝

花さかりぬくらもも誰かいよつま風かもおるぬ出こゝもの又八

筆たの指南の形の刻ね生き新そ一切の吉
凶を判定するまなれハ花の時の相をま風とハ
いはれぬ形をあるいと無おもも薦信の
三味線きあたりまうけ面桶腰まつけ長襦の
戸よりて又八ぬく外よハ字の業あきなきまや

されハぬくとも誰かいふへきといひて此はわらぬ
ひとへハとよあまた花盛とおほく文字此なき花の
情なれハひとへの興一しほならへくいれいかせ
る花なるし慕おきの古形ものも舊法の一曲
やさしくきこゆるにや

七番

左　持

たかの山彼の世無常と有をと坊をうれてたのまん　高野法師

右

おほゆる花の香ふめて中くの紅の人の袖にうつむ　順礼

高野居住之聖、諸國巡禮之客、或期五十六億之會、堅或約三十三所之霊場、共雖結佛道修行之果、在慕人間栄耀之花、歌科更無甲乙、判詞難弁勝劣者乎

八番

左　持

道場のあるしならねとう紀ても称よ遊行の紀やたのまん　うまたゝす

右

宿なる妻をいらむ上然るしハ花の下ある約たきるる　ひまたゝす

たのみねさき会佛弘道のこころさしもとうそ
迦陀会設地の求を捨て恋よおもりせんといへる
ハ花紀をも欽ある郭耳みもいらぬ花のしもみ

常まゐらむの人こそ堀かく侍る右の胸あきまきをそか
つりたる寂寞のかたをあきのこゝろもめでゝ
袴からしまちうまや霰まよ名をまゐらむと哀
季よ袴りを表の為そこを見ひろせ異胸の
うちやさしれこそ侍れた右勝劣なし持まて
侍るなむ

九番

増補節用集
表補繪 ヘウホエ
活板節用集六卷
食服門表補繪 ヘウホエ
表背繪 ヘウホエ
諧聲品字箋兩
集助語部ㇾ褾
褙褾表褙背也
凡糊物者必兩層
以有書繪者向
外謂之褾以無染素紙托其背為褙也

左

山水もくろ繪えうのつらほうゑ花のふしきを中へばなして

へうほゑし

右 勝

きぬてもをまの日ごめしおきまあへて袴くれてそらいかなる

そうとの

十番

左 持

紫山水の絵象牙の軸金襴の表紙よりも花の跡の
中へつらしくみてそらみて山水の其景も光ま
ゑふこゝちし侍るよ此絵表の表のひとめ飾きみ
人さへ花見の出立よ男女の衣服どもえみたしるる
さまつきうしくいひなされる女の顔ハよるきかを
ゆゑにふみなるよからしくしくきてたる口つき
いふ袂その手をちぎれ立田姫のこゝろをれへつらひ
侍りし花の錦の一幅のくはしくえまなきそしかき
無いめと思ふこゝろそし侍るいくひ

右

紅人

右

さくら月花よ寄るか哉ニ井とこそいひてハいそくくるまこうせ
やをまほそさへなるかつら茶屋の前花の下り在のこうしろき
たのもしき八ま中わすれ給ふるの名をのミへりへやさき
しぬよ下もき思ふよるうなれバなひく浦松
花の下ころなかうへくおのまよろしきなれやふきこゆ
右の哥し鼻やをかれハ心かろらむしよりて茶屋の
おもと花の下とをさまよいひ出つるそ唯なかりける
こと成道ふて是茶の徳をとし陸羽盧仝を学ひ
こそへるら赤やて一休禅師の学者よ占めしくらむ胡録
の味をころのうな無ふつ遠の徳なくハ別此用而
なんともなしむとも云えし花さく吹さかん魚ニ長風流な
きくへれ但その文をかハ文屋康秀
なと類して侍れハ持まそくへなん

十一番

左 持 農人

とゝおりる家のこ秋の名ハ是のなかよのとまくつき

右 庭ちき

名をたてゝふこゝや庭そゝきの家の風をそらせの胡きつめたる
五穀のねたねとる家運家門田まるるて是の名を
ひもまくらす二つる農業の家よハ花まとハんを深
つき事ころうまよ侍る是の田を人よまかせて家ハ

たゞ花にのみこゝろをつくるにもあらず農人にあら
ざりし家の内侍らふなれハ例によりてなしくなむ
そ赤庭のきの家風にて花の落さきにあつる
てる庭掃にあひたくてこそ此歌をハ判しかたくハ
侍れ農人の下庭をきゝて花にハめでらぬさまなる
家藝におそふこゝろハ見えて如何にて侍らむの家
をなし　ほとゝもや

十二番

左　持

よしの山枝木なれハあたひさへ花にあらはせて　材木にて

右　竹にて

にあたらのよき枝あれハたをりし花のこゝろのわかれ竹

吉野の山の枝木花にあはせてかゝるこそ
いひなしの字ゆきてこそ此判者先年ある人に徳
を講なりける所に徳ありをもたてむとて枝木にによ
し吉野の山に入し事おもひ出られて無下なるく
ちし侍り赤此竹の所の外のあるしにも学
をつけて花ある道ハ則其術の名あたりの枝
に用心をそへし道の心ひのもあり竹の従
といへるなりしこくの字ゆ此竹枝木におとりちやて
へらむ

十三番

た
あさまつ柳の桶をいさ結ひかへし花をとめてあそてらむ

結桶師

右 勝イ

火打うりて

八重さくら名にあふ京れぬなれは花かりするやけ火打か
左結桶師か今日は花をとりてかへし花を其
のこの歌なき名香よまかさむる柳の桶ゆへ
あはれてもきこえも題にまてはまへかくして
正体なは侍らね右火打売ちかふらの歌の八重桜
をよそて人ふれぬ京の今の花よてなれなまり
やさしく侍る火打のうち花をき花つくして
いふして侍るいかもよくみる調もゆゑあるさまに

ゆへ右勝へし

十四番

左 持イ

糠粽うりて

まことなきそとうそしつくの糠らまき花をもこゝろのいろの体なる

右

地黄煎うりて

花をとらふよしみもやはと地黄煎菜のまも本すなる花れる

前陣糠粽、慰三輪山之露宿、後陣地黄煎、助大和路之風飡、各於境界之土産、共在其時節之風味也、有興有感、無優劣乎

十五番

左 勝イ

ゐつくろうりて

絲みかくよ花ハよろみむ絲の名のうつくるうきよりたにかくしつ

右

一枝乃花ハひとへきかハも菜もとるやこきたるのたえぬかをめせ

花のあの二人の絲ひたハ算袋の藝のその一なる菜算北斗ハ四なる中にも算光輝ある星まや絲多かくも花ハよろしむ仏の名とハ算つくろもさよりとハくろしつといつもおとなりいてこきこの抹香先下よをるうちもとくとへ述るつるやみてたのは位たく侍きハ為勝

十六番

左 持イ

信友云以上花ヲ題ニテ十六番アリ以下ハ述懐ヲ題ニテ又十六番アリ職人ハ同シツガヒナルユヱニ繪ハ十六番アルナリ

もろあにくこ云ぬる花の影よしるや菜さくもさくろあらきん

右

かつらそハ花よとろもあきくのうる扇のすハさくろなきとの

右雁料理、得ニ左ノ向ノ多智ニ添ニ氣味ニ此番可ニ持

十七番

左

述懐

たちまへかせんにに万乗いつくるもくくしき升の縁をそくひなき

右 勝

我とかくり悪亀といきてるうなせにしたのめくえたるめくらなりれ

右所いつてまても氣多ゑうつの禄の名妙かうまをとやうかはうくと思ひそかうまいま袖うへ兵

ものを一きれ氣色ハかりぞ舞たまふもある詞
つきあふて出して枝優にすゆるや右の琵琶
ひきそ捌とといふこの二句にあはれなく侍と
平家ハ入道の姿にて盲目之絃をとくハ△弄
せらるる絃をうる琵琶ひくといひきめさえ
なめくらといひて自他の不作をよくよみ
見けるなかろ娌のくずやも左ハ詞の優なる歟
めぐき右ハ義理ふかく侍きハいさかかまさら

△倍形ニして離婁が明をもちてして云[illegible]四絃を古作リ

十八番

左

へきらかや

獅子舞 古 イナシ

ものならしおほつなしやほねおちしの何をちからに世を渡るらん

右 勝イ

富士のつらひいかに[illegible]ハ中にも我にハましの能の さるひき イナシ

左獅子舞ハ自動に獅子の姿ハなくて骨なし
の一能を見いでぬる倚影よし雑[illegible]へきて筋業に浮
[illegible]歌にて發吐に詠るる所之の動揺にかく
是此事也と[illegible]出侍るへ[illegible]の骨なしと
いふ事をうたれし獅子舞の葉帯ある能にかく
骨なしをとなへつら獅子お撲とかとるや[illegible]
ハ寂無ある事にや何を[illegible]世をわたらん
と骨なしのよみなる利口にも侍る右猿曳のつらひ

いなせハ畜生とよれよハよしの鉢にまかさとといつるやとて
らるまいひしされて兎角右ハ其歌のこゝろたし
まつ作れハ拙なるましおもひたるへき

十九番

左

ま(?)あやうくよき黄鳥とは中まされハやとてとひ鳴きや声にやあらや

右　勝

哀なり小鳥一羽をさんとして天子のせ給ひし代にありしを思へ
鶯飼ふ鳥慢をおこさハ我も家つ宝物にも宋
へきて黄鳥のとひ声を鐘ましれたるハ言ひ尽し
およそ侍らむ鳥さしの小鳥一羽に月かけてり

こゝろなき志賀まやふのかけなとよさきをくりしくして
窓よれるさみゆるむらちして哀しく侍る下の句
さるハこのころ毛詩正月の篇の本文をあやまりまほれ
なせハ自作のかく文まきやうなれとゆるしかたき所の
一弁よまれる哥事なるへし左ハ歌のたしかなる
とみ抜弁との作れハ右勝へきにや

二十番

左

松かね枝ハ世よいとなる哀のそひきこゆる山鳥みそうまし

右　勝

あなたうとつらくもいしの火の光をやとてするつ佛

たをうしきこうろ山をさをいつる宍く待るよ
三の句より下の句へうつる詞つゝけおもしろく右
の石きりのつくりしきかたをあらそふは佛は
通力なや

にくゝはなくて石よりあらはるゝ佛乃力ならんこそゆゝしき光明なれ世中さ人を道理なきにあらすや當時の佛谷の観音と石佛侍らんたくひに光明にそたとへ侍りなへたゝ右勝にあるへし

廿一番

左

名のりのみあるは上﨟あまりやよろしからぬあらそひ

右

うつくしくうれとてしもくら法師はあかつきをひとりよめるさん

左歌上句も桂の境の持書下の句は桂の
暮ふ影の出立や名のミ上﨟まて出立は

さこれもうらめしきれつゝさゆくへもあらし
くまなき左歌能出修正の志らうち孫いつる
れとそしもうた玉のもつくろ髪をたまてそや
よくんやいへ歌をけなく捨れ負女に
なりかはり帯をさよ待るまかき出して
うた法師はよめる髪をとひ孫ありさすかなると
本歌を通つらをすして志らとその詞をとりつ
せり歌うらの孫ありしやいひやうれなさまた
う孫ふくれ桂の上たくひろての子をやうなる
ときゝめふかゝる志なきありかきくらそ見

さまかれつつ捨といひて紛きやうなれと
かの老陰の宮の御むすめ小家おちみをこそ
薫衣香の垂にしそへて乳母の侍従かれた
ひくれいやしきあまれすさひにあゆまし
き侍の玉ちハ詞の玉かつらかを侍りける
様か宮よりあはるかつらなとも系なるや侍
らせし

二十二番

左

むかし顔の玉かつ屋のうちに身をおくるはかな
くはかなきのみつらきの夢や

右

侍し入もえたるやさかやの玉かつらし夢をかへてこそ六茶めくり
算おきの述懐あはれ玉かつ屋のうちさ所と
おしからられ侍り玉かつ貝れうら侍りて
の家ともなおのかりにあたせてハ不足なる
みや父天の身之人のうら屋まて日禄をとふ人
たを侍ねた家一生涯の果報をも自身なりん
く入ねらんをたるはかなきほと伊ひそうとかうや
こと侍れ宮かすかしまた老倉の旅吟を
ゆつりてうつりなる此の子にしは世をも

あるこゑを切いてしらんとしろりなき方便
ところおふくん待ちみそさぬとゆふくされ共
詞にて汁糟法妙いひしせてきこゆ汁つくり
持にて侍るべし

二十三番

左　勝

高野法師

やれころもこのたびかへるはうきものにこひつつ老いのちよのよかさねる

右

順礼

同行のかみそり御てらおもてのかみよ三十三の茶をもかな
せなかにはおつるなみたのこほれ花の老の志

しみじみよきわれとるちかひこころは肩
たけかた拝みて和歌の浦波とこまいづの山より
ふきだしの世三の茶をもちて一丁は肩にかけ
侍るべし

二十四番

左

鉢たたき

息のしらぬまときは阿弥陀仏のなもたきをん

右　勝

むねたたき

ねさめしくちきこへうくのをも捨てし身のうきなかはいさてつかの
称名念仏の一行を自力聖道の諸宗にかけ

さるはそれも日本ちきの粗を衣神立ならぬ
ましき事なれら左右の歌を吟味し侍れ
そのさましなやうち出るよりさらにかく
さぬ胸のうちをいはゞ身の皮さぬきいはゞて
かんやくこひうる詞姿諸秀逸の躰と見えうり
うの重明のみこは七宝かざり給ひてきこえ給ひける
黒貂のかはぎぬなどもかはり詞花花の名書ハお
よろしと覚侍り左の息の跡右は身の皮は
まけ侍りなむ

二十五番

左　持

いろは馬なしぬ絵の色うつろえもさだめなくのりの

右

西の日をもて見てをき一筋なる也肉なりひろき皮つくりせん

表法寂師のよみける左の歌いろはなんてあらぬ絵
の色うつろえと侍る上句まで心なりぬる の
あとつけ出るんちし侍るを下句をよくて
なれて侍さたしころく詞のこゝはきこえ
あるふうて比る花尾髪などされあらしくこえ
侍れこ敷の心の歌内なりとかろきやう

に造作をして面白くも装束よろしきをこのみ
潤色はすこしみえて出仕させんことを多くある
女工所の縫ひもんなどくきらゆたかなるも
なり躰をそろへ大かたなきさま徒を見せても
可為持

二十六番

左

夜川やせゝにさすゆふかはかなくもちはらすとてあらうしやかな

右 勝

浮の世のうきをいとふもかなしむのもろしたるさし合をなる

左方夜河尤早き瀬たえをもとめし
ちはらの補なきことをうちにもそこにも
うてあとよそへいつるハ先くさまにまさえ
ゆ字をといつるや様の字みえあられとも瀬
の字にも不文字あまれを花多川淵にも
あらぬ家なりとよ知るこそ瀬と誹をお
兼てハさらゆも此派しきんをいよいえはせ
て行れと第二の句一字かゆかれ侍り右のこ
しかき浮の世をし身を捨て昔於志のうえ
捨りし安楽の思よのこそ世すかを今ね

ありて三人の恵よろこさへ至誠をかちひろこき
そしさしあるせれ苦行あちさなくそ侍ふ
たちの家ものゐまりそ恵みとこ桂おもひ
侍らし

二十七番

左　農人

作りつくれるを人まうけたるを人わらはしや百姓らの名をおもへつらえ

右　勝　庭掃

すて成らぬ世をとくいかさうにも庭はきさそり庭のちりの我なから

農耕之土民對地頭乞損亡掃除之庭掃立

庭上好奇棄共先道理又兼風情雖然帚
猶有千金之誉百姓閑口乎

二十八番

左　持　材木賣

あるよしのふる庭つくるにはすきの門木のきれかくを人もとめつ

右　竹うり

うりかねる志かんど竹のすゑの家ものつくのまうらにてなし

材木賣の方へ縛うきうの白綺おもよいて音らくれ
なゐるへし竹賣又自然期の高竹をかうり
う弥ねるう其へと打ちかし猶の家よ侍り左右

左猶劣可為持

二十九番

左　結桶師（古イナシ）

竹ならぬこゝろもまげじ桶ゆひの世をわたる身は正直にして

右（勝イ）　火鉢うり（古イナシ）

風呂火鉢瓦炉ぬり（塗イ）桶あまたよりよくあきなひとなるの古き

左の結桶師の三昧（昧古）正直をもつて家業は器なり此ならぬんはまづしとえばうらんに制戒をたもてる身（肯乃征古）禅妙に侍り右上の釣乃三釣に五種の家具をいはて勇
一境の上に切をはめ謙に右は万物をのせ負る徳をさまざまにはかり出しやきなせる奈良の土ひろの京へ下り侍る（いり古）こゝろこれあるを侍りせぬ（左古）左声韻の病侍るをよきあきなひて勝にや

三十番

左（持イ）　糖粽うり（古イナシ）

さ月（朗古）やちまきの身となるなまし　あまてすりのかざりちまき

右　地黄煎うり（古イナシ）

うなゐ子ちまきのなかにすゝめつゝのはちもち（のイ）はちらうせんかれ

あすはしやまぬ大みそかにまた月にいとひて

にのるよあるんでゝふ指やで侍るあ身るはれんをふく
ゑんうまゝや心附あるんまてさんはうちあきをも瑞年
ありハ歯ら目ふてかぶりちょうきらずせんとよめ気
ん詞あくらふ字味多ゝ侍りおうおる
子ら母の乳味よもおとらりまじうそひ忘るゝ
まう世くちつきてるんちしていそびあまで
侍る地黄ハ無尽蔵上の良薬なりける骨肉
同胞の類なども血道うちふちなどもせバうちある
子ふきもともあふてかずしようしられとお
なし経の耳味よこちそ侍れ

三十一番

左　集佐たり 佐本

いろぢらふるが身はちてもいらせん人のひいぼる手をなしても

右　しれみうり 佐本

よしや身の佛さきをもざうりさうさうき世の袖に志わぬ

うき世の袖に志わぬ花香古いろといゝるようも いろ

つらよある身のそのの恵味なるをなかき他人の

秀才なるをらうやらて自己に商売に懐

をのつる謙よむびきらんあるさまうしきうえ

侍り十文当にたまてぞ花の都にる師の

此字本ナシヲ書ル ヲ乃花ヲトミナレテノ ツヒニ奇ニハタきかうト モ作ル之

高嶺を迷ひて歳くれはよるさへ志むけ箕らまし
一つ袖なく海なりてや侍らむ

三十二番

左　勝

はかなしや宿とたのむのあさなあさな内侍のなみたのかゝるうき

右

みなひとの身にしたかふ世の中のはかなきはひのとりやれるはかなきそうくれ

左のうたも宿となるうちのあはれなるを侍りかたき内侍の道のほとりさこ
梅さえかうかなしきいと忍ふれとまたは雪ふりて秋方

海よふしのうへの庵みは神かきと遠き雲の中なと誰よさゝる陰なき大嘗会となるのかゝるらこゝろも
つれてうれてうたるすまきをうしくと侍らるむ
右のうたはあはれに行の行かかるまさるまと
またも筆の不祥なる事を世話の壱謡
まよせていつしも根あさうらにきこえゆいの
きは左は葉うたしの右のまことゆかさる庵まきよ
や

古写臨本奥書
右一巻以伊勢殿蔵本令謄写了
寛政五年十月五日
松岡辰方

右三十二番職人歌合謌人書寫畢歌文詞等以諸本朱校

天保九年九月五日

伴信友

摹本の序詞歌判詞いさゝかうつして写し添ふ

序詞 屋まと哥は道ある人士女の家たかしともちろく

花鳥のなさけを拡え山林も食れ容れ活計

の媒とするたくミまわ

歌発端 一番 花

左

千秋万歳

春のはしめ千秋万歳いはふ とかり

ちる秋の木の根いさしさゆるなし

右　絵解

見せさぬ語るや繪よりもまさる花の紐

とけしとしもわかよにけしく

判詞

左の千秋万歳ハ能作ハ文年正月　若佳曲

なるべし、右ハ法職諸道乃初に

一番に合ぬめり　いろ〳〵歌合乃

同尾

きこゆいろさ西左乃葉より右流まさる　まち

西やきよりや　家

以上

此三十二番職人歌合を世に彫本にして左来る七十一番職人

哥合に継ていてさまつるものなくして序詞なく都て其上を以て此世と

以つてとハいまた考へて古き本此本をうたしく後法本にあるを見る中す

しかた諸本文字とろ（古き未物の繪也）の歌判詞など摹写しくもさまてるほんを借りてあきらかにみ

なるか互に誤字多くして書とするものにして仮字も真字もとかく

本をくらべて読みて紀せよろかうらかの（その）摹本なるハ諸

脱しそとも西あるを正しく文字れと本文字の誤たるもまた

しつかまつこの摹本も諸本にある中にそのところ正しく見ゆるあり

此にて字を原書なくあらくなむ帰る官本の（宮本中にこそ）

此らとり此本をも比の哥合に（序詞なくて）絵をまたく別職人

は名をもって誤なり（のため）点かある本あり文その本にもかし異なる絵

の文さ事もあり准らへてたるひ合を通しまさ文此哥合の絵詞本

かそれに精粗あるでもとえ同しほんとみえたるが此うつせる本で

おの状らくる中らくハ彼作りてさゆされと他本も少なし

なろしと見ゆるまうたろう称し加へたりしの異なるそこらかうそへてかむとて

書る人ありてつらくくるみるに歌も詞も絵のおもむきもいかゞ
をかしくあるへくみゆるハわれのみならぬにやとしらるゝ
ものなりけりつきむかしよりねもころにそのほとけとわきまへ
うしろ此歌合の二十番右歌は判詞に当時のさまを佛谷の観
音を石佛とこそ申なれといへる詞あることの哥合都人のと
はせるものとおもえたるを都にさへなるほど谷の観音といふ今
もある事其をやかいてたる時のとしを知る縁起なとのあるな
むかしハ古本より年ごろの考にあらしとおもひ居きなり
老店如庵し

天保九年九月二十八日信友しるす
又いふ後によりて見むとき歌詞をもよく正しくうつしかへ
むかしの風は同し心なる人もあらむかし

天保十五年のとしある人来よのおもかけわかれ弘化二年の夏此山の寺に来りてもとめし都の人
にすなはち谷の観音を同寺にうつし山城乙訓郡大山崎信善谷といふ慈悲尾山西観音寺と
いふは叡山西覚院末の寺なり此谷の観音をもいて縁起什物等残失して何もあらずしかし今
本堂に十一面千手観音の像をあがめ石佛ハいづくにもなき寺の古記の中に寛弘年中此
寺より焼亡せるを仁平四年八戸重忠再建慶雲律師開基とかけるを始ていとかへる
谷の観音なとまでを件の考に佛の居き年頃の記とするべき事ハあらん
信友又しるす